

# やまと 民俗への招待

ムダで云ふの祭典

鹿谷 熟

1982(昭和57)年

の秋、奈良市東九条町の公民館で「御供搗き歌」(餅つき歌)を録音したことがある。公民館の玄関に大きな木臼を置き、男たちが取り組んで千本杵でつく。始めは小づきでゆったりしているが、本づきになるとテンポが速くなる。「めでためでたの若松さまは枝も栄える葉も茂る」「思つて通えば千里も一里、会わずに帰れこうした歌に「オモシロヨウタシヨー」の囃子が

から競うように出てくる。つき上がると公民館の中へ持ち込んで、丸や細長い餅などさまざまな形にされて、花御供や坊主御供などが作られる。元は祭りの頭屋の家で行われ、男たちは鉢巻きに腰巻き姿で御供搗きをし、終わると天棒で木臼を担ぎ、臼の上には紅白の采配を振る者が2人乗って、集落を練り歩きながら、次の頭屋に臼を担ぎ込んだという。



東九条町の千本杵による御供搗き  
—奈良市で1982年撮影、筆者提供

## 農村に伝承 室町小歌

かかるやり」という歌詞があった。女性を2階のほこりにたどえるのは、どういうことだろ? と思

った。どこに嫁入りするかかるやり」という歌詞があった。女性を2階のほこりにたどえるのは、どういうことだろ? と思

付いたら離れず、恋の病に陥るから、薬師へ籠もれといふのだ。17、18歳

美しい娘盛りの時で、すぐ勇たちの目に飛び込んでくる。その姿が焼き

付いたら離れず、恋の病に陥るから、薬師へ籠もれといふのだ。17、18歳

いた。ところが最近、江戸時代の歌謡を集めた『松の葉』(元禄16年刊)を読んで、七七八は長押の埃、皆殿達の目に入りた、目に入りた、目に入らば薬師へ籠もれ、薬師の前で自療治しよ自療治しよ』とあった。17、18歳は、

歌は、「十七八はあさ川渡る、我が妻なみにや、負い越やそ」(『宗安小

歌集』)「十七八は砂山の脚踏、寝入らうとすれば、振り振り起ひむる」(『隆達小歌』)など室

ていた。

ところが最近、江戸時代の歌謡を集めた『松の葉』(元禄16年刊)を読んで、七七八は長押の埃、皆殿達の目に入りた、目に入りた、目に入らば薬師へ籠もれ、薬師の前で自療治しよ自療治しよ』とあった。17、18歳は、

歌は、「十七八はあさ川渡る、我が妻なみにや、負い越やそ」(『宗安小